

## 津波体験を後世に伝えるために

— 津波防災文化の形成とカリキュラム化 —



山崎 友子

(岩手大学教授)

## 一 市井の人、田畑ヨシさんの紙芝居による

## 昭和三陸大津波体験の語り継ぎとその再開

昭和三陸大津波（一九三三年）に遭い母を亡くした

田畑ヨシさん（岩手県宮古市田老在住）は、一九七九

年にその体験を紙芝居にし、以来三〇年以上にわたり  
ボランティアで津波体験を語り継いできた。「最も怖

いことは忘れてしまうこと」との信念のもと、命を奪  
い、家屋敷を奪い、生活を奪っていく津波の怖さを、

黙々と子ども達に伝えてこられ、町の子ども達の中で

田畑さんの紙芝居を聞いたことのない子はいないと言  
われた。<sup>(1)</sup>そして、二〇一一年三月一日、三陸沖で発  
生した巨大地震による大津波により、再び自宅を流さ  
れた。紙芝居の中で八歳だったヨシさんは、今八六  
歳。昭和の大津波から七八年後のことである。

紙芝居に描かれた大津波の後の田老は、防潮堤の一  
部まで破壊された今の田老の町の景色である。地震の  
後すぐに津波の来襲を恐れ、高台に避難した田畑さん  
は、高く盛り上がった海が港に押し寄せ、田老の誇る  
防潮堤を超え、すさまじい勢いで町を破壊するのをそ

の目を見た<sup>2)</sup>。そして、傷心の二ヶ月を経て、五月二一日紙芝居を再開する。「津波に負けない」という強い思いで、もう一度語り継ぎ始めた<sup>3)</sup>。田畑さんの紙芝居による津波体験の語り継ぎの再開は、昭和の体験と今回の平成の体験をつなぐものであり、津波の実相をリアリティをもって伝えるとともに、ふるさとの人と自然に対する変わらぬ愛情が滲み出、心を打つ。

このような市民による尊い無償の行為は、津波対策としてハード面だけではなく、ソフト面での対応がいかに大切かということを示している。では、「教育」というソフトにおいて何ができるだろうか、何を行うべきだろうか。被災地の学校訪問から考察してみた。

## 二 津波防災文化形成の核として

筆者の勤務する大学の共通教育科目「津波の実際から防災を考える」において田老への巡検が続いている。平成二二年九月には、田老第一中学校において中学生と大学生がともに田畑さんの紙芝居と津波体験談を聞いた。それから半年後の三月一日、午後二時四分の地震発生直後、中学生は校庭に集合した。教師

には「三m」との津波情報が入っていた。防浪堤は一〇mの高さがある。しばらくして、校舎三階から「津波だ！逃げる！」と叫び声があがり、生徒と教師は二手に分かれて裏山を駆け上る。高台で全員の無事が確認された。

平成一七年六月、田老第一中学校のある宮古市の当時の中屋教育長は岩手日報に掲載された記事に衝撃を受けた。中央防災会議による津波想定二〇mとの分析結果が目飛び込んだのである。「それ以来、できることはすべて取り組み頑張った」との言葉のとおり、県作成の津波教材による授業開発、登下校時の災害対策として高台の民家へのシエルトの依頼、その目印となる標識のデザインを美術教師に依頼等々、独自の取り組みが進められた。田老第一小学校や鉾ヶ崎小学校では、津波カルタが作成され、「地震の後は津波のけいかい」「それぞれ逃げよう高い所へ」などの警句をカルタにより身につける工夫がなされた。

このような取り組みを行った中屋前教育長は、平成二三年度全国教育研究所連盟総会の復興支援のための情報交換・話題提供において、「津波災害文化が宮古市

にある」と述べた。教育委員会の取組みの他に、田畑さんの紙芝居やそれに解説をつけ英語で国際的に発信しようとしている本があることが文化の形成に寄与しているとして紹介された。

地域での取組みに学校での取組みが加わり、文化が形成されていく。銚ヶ崎地区には、防潮堤がない。地震直後、銚ヶ崎小学校は避難を開始した。予定されていた避難路に崖崩れが生じていることを消防隊から聞いた校長は、すぐに避難先を学校横の神社に変更する。小学生が神社に向かう姿を見た町民はその後に続き、神社へ避難し、人的被害を最小限に食い止めた。学校と地域が一体となった姿が見られる。

先に述べた田老第一中学校の校庭にいたのは中学生だけではなかった。川の間こうから保育園児が約四〇名避難してきていた。「逃げる！」の声を聞くと、園長の指示を受け、中学生が幼児を手渡して小雪で滑る急斜面を上へ上げ、押し寄せる津波から全員が逃げることでできた。自分の命のみならず幼児の命をも救った中学生の心の中はどうか。命の尊さを実感するとともに誇りに満ちているのではないだろうか。復

旧作業において、瓦礫の撤去作業を消防や自衛隊員に混ざって行う中学生の姿が見られ、勇気付けられたと入学式の式辞で校長は述べた。中学生に自分達も町の復興を担うという意識が芽生えている。

津波防災文化の形成は、津波から命を守る地域作りがなされることであり、さらに、復興へ向けての力ともなる。そして、学校はその核の一つとなっている。

### 三 津波減災教育のカリキュラム化

今回の大津波の被害・犠牲を拡大させたのは何であったか、どのように改善できるか、逆に何が減災に有効であったか、今検証されているところである。その結果を後世に伝えなければならぬ。記憶が薄れないよう伝えていくためには、カリキュラムの中に入れることが肝心である。幼稚園から大学まで、社会教育において、何度も様々な切り口で減災についての知識と態度を伝え続ける必要がある。繰り返しの効果とともに、年齢や立場や生活の場所などの違いに応じた適切な対応の仕方を学ぶことが可能となる。

一つのマニュアルでは様々な特性を持つ地域に対応

できない。異常な揺れに、マニユアルに反して揺れの最中に避難を開始し、全員を無事に避難させた学校がある。ここには津波が来る可能性があるということを理解し、常日頃防災学習を重ね、マニユアルに指定された避難場所以外への避難を瞬時に判断し、全員の無事を成し遂げたところもある。学校が津波の到達しない高台にあることから、子どもを迎えにきた保護者を学校に留まらせ、犠牲者をゼロとした学校もある。地域の特性を知ることが、災害時の瞬時の判断に生きる。

例年より遅い四月二五日に田老第一中学校の入学式が行われた。半数強の生徒が私服で臨んだ入学式で、生徒会長の村井旬くんは、「校歌の三番に私たちの進むべき方向が示されています」と言う。彼は三番の歌詞を続ける。

「防浪堤を仰ぎみよ 試練の津波 幾たびぞ 乗り越えたてし 我が郷土 父祖の偉業や 跡つがん」

校歌に田老という町の歴史が組み込まれ、田老の町の子どもが育てられている。文化形成の核作りともなる教育は、地域の特性に基づいて行われている。

津波のメカニズム等の科学的な知識に加え、地域の特性に基づいたカリキュラムの開発を行うには、地域と関わりずにはおれない。その過程をとおして津波防災文化が形成され、よりたくましい地域・学校教育が創造されよう。教育の「新生」の時である。

#### 参考文献・注

- ・岩手日報。二〇一二年六月三日。「被災地を歩く10」
- ・田畑ヨシ作、山崎友子監修。二〇一一。「おばあちゃんの紙しばい つなみ」東京・産経新聞出版。
- ・山崎友子。二〇一一。「子ども達に語り継ぐ津波体験 紙しばい つなみ」改訂版。盛岡・五六堂印刷。
- (1) この永年の功績に対し、二〇〇六年に社団法人全国海岸協会より「海岸功労者」として表彰された。
- (2) 人口約四四三〇人の住む中心部では、建物の約八〇%が被災し(全壊一六〇九棟)、死者・行方不明約二〇〇名、田老町漁協在籍漁船九六三隻のうち九一五隻が被災。(岩手日報六月二三日版による)
- (3) 「おばあちゃんの紙しばい つなみ」(田畑ヨシ、二〇一一)に、震災後のインタビュが掲載されている。
- (4) 平成一八年度科学研究費補助金(課題番号・17653109)により製作された「子ども達に語り継ぐ津波体験 紙しばい つなみ」を指す。震災後、改訂版が出版された。